高知県立文学館ニュース

Kochi Literary Museum News

高知県立 文学館

藤並の森

vol.92 2021.03

リレー随筆

『シンデレラ』の世界伝播を辿る

浜本隆志

によどの川風：継母がおさよの髪に油と偽って松やにを塗り付け、髪が解けないというおさよの髪を切るシーン

によどの川風表紙

まま子のお藤：お藤の嫁入りシーン

まま子のお藤表紙

シンデレラ物語伝播のルート

『シンデレラ』はどこから来たのか

『シンデレラ』は女主人公が苦境にあってもそれを乗り越え、幸せを掴むという成功譚で、多くの人びとに愛好されてきました。一般にこれは、ディズニーのアニメ映画『シンデレラ』(1950)で知った人が多いでしょうが、そのモデルは、フランスの童話作家、ペロー(1628－1703)の『サンドリヨン、あるいは小さなガラスの靴』です。また『シンデレラ』はグリム童話集にも『灰かぶり』として収録されており、類話はヨーロッパ各地に広がっています。

すると『シンデレラ』はヨーロッパ生まれの話かといえば、実はそうではないのです。調査すると、古代エジプト、西南アジア(トルコ、アラビア、インド)、東アジア(チベット、ジャワ、中国、朝鮮、日本)、北米など、世界中に分布しています。たとえば古代エジプトの『ロドピスの靴』は、靴が取り持つ縁で美女ロドピスが王様と結婚する話ですが、今から2500年前には、この話は存在していました。

土佐民話にもあった『シンデレラ』の類話

日本ではこれまで『シンデレラ』は明治以降、ヨーロッパのメルヘンが翻訳され、受容されたと信じられていました。これは受容史の一系譜でありますが、実はそれだけではありませんでした。古代に大陸か朝鮮半島を経由して、日本にも『シンデレラ』の源流が伝わっていました。すでに『糠福と米福』として民話になっており、平安時代の『落窪物語』もその変形です。

県立文学館の川島禎子さんのお話によると、土佐民話のなかにも、『によどの川風』と『まま子のお藤』という類話があって、紙芝居仕立てになっているとの由。これらのデジタル版を拝見しました。あきらかに二つはヨーロッパルートではない類話です。『によどの川風』は、気立ての優しい「おさよ」がまま母につらく当たられるが、山内家の家臣深尾さまに見初められ、「玉の輿」結婚をするという筋です。これはシンデレラのモティーフを、土地の風土に合わせて自家薬籠中のもの※にして、継承してきたものです。貴重な高知県の文化遺産といってもいいでしょう。

『まま子のお藤』の方は、九州、岡山など、西日本に分布している話(『皿皿山』系譜)と、タイトル、登場人物名、筋などが同じで、土佐オリジナルではありません。しかしこれも大陸から伝播した話を、日本風にアレンジした結婚譚です。土佐の先人たちもシンデレラ譚が大好きであったことがわかります。これからもみなさんが協力して、ぜひ子供たちにこれらの類話も語り伝えていただきたいと思います。

(関西大学名誉教授)

※自分の薬箱の中の薬のように、いつでも自分のために役立て得るもの。

シンデラ展

～ 語り継がれる幸せの魔法 ～

会 期：令和３年（2021）

4/10 SAT ▸ 6/13 SUN

午前９時～午後５時（入館は午後４時30分まで）

①-A

①-B

①『The history of Cinderella; or,The glass slipper.』（1825）

昨年やむなく開催中止となった「シンデラ展」、今春パワーアップして開催です！
今回は絵本に描かれたドレスに注目し、シンデラ展の魅力をご紹介します。

シンデレラはどの絵本でも素敵なドレスを着ていますが、よく見ると、ドレスの形が時代によって大きく異なっています。

モノクロ印刷の上からステンシルを使った手彩色が施された、1825年出版（蒸気機関車による鉄道が実用化された年です）の古い絵本を見てみましょう。少し前の1800～20年代、ちょうどナポレオンの戴冠、ロシア遠征の失敗、失脚という一連の出来事のあった頃ですが、そのナポレオン一世の妻が戴冠式で着用したハイウエストで筒形のエンパイアスタイル（①-A）が流行していました。しかしウイーン体制に移行後、1830年代になると足首を強調する短めの丈で袖の膨らんだロマンティックスタイル（①-B）が主流となります。ちょうど移行期であったこの絵本では、両方のドレスが描かれています。

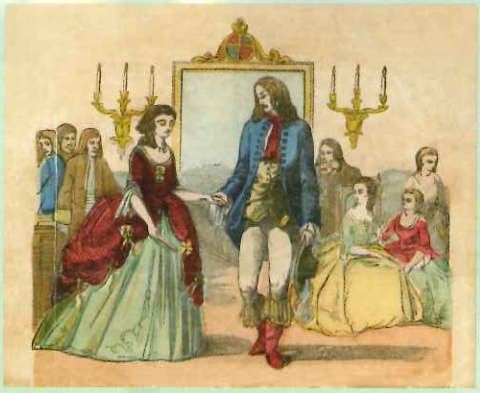
19世紀中頃のイギリスではフルカラー印刷が可能になり、やがて絵本の黄金期を迎えます。この頃流行したドレスは、ボリュームのあるクリノリンスタイル（②）。

19世紀末頃になると、産業革命以降に工場で大量生産された粗悪な商品が出回り、日常生活に芸術を取り戻すアーツ・アンド・クラフツ運動が起こります。この運動にかかわったウォルター・クレインのシンデレラは、腰の部分が大きくせり出したバッスルスタイル（③）です。この絵本は、文章とイラストのレイアウトを含め、総合芸術とも言える美しいものです。

第一次世界大戦の頃に流行していたドレスは、ハイウエストでゆったりと布が流れ落ちるスタイルで、ターバンやクジャクなど異国的な要素が含まれているのが特徴のオリエンタリズム（④）。コルセットからの解放は女性をより自由にしました。

絵本に描かれたドレスから、さまざまな時代が見えてきます。展示ではこの点もぜひ注目してご覧ください。

（学芸課／川島禎子）



②Smith-Hill. SC.『LITTLE　CINDERELLA』（1858 アメリカ）

③Walter Crane『CINDERELLA』（1897）

④Ives, Sarah N.『CINDERELLA or the LITTLE GLASS SLIPPER』（アメリカ　1912）

Report レポート

「百花繚乱 ～高知の女性文学史～」展

只今、好評開催中

西洋の様々な世界観が日本に導入された近代以降、クローズアップされてきた女性文学においては、高知からも多くの作家が輩出されています。

両親が高知出身で明治の後半に活躍した大塚楠緒子や、高知出身の夫中島信行の自由民権運動に感化され「女権論」を唱え人気を博した中島湘烟。明治から大正にかけて、新しい女性として登場し、小説家や女優として活躍した田村俊子。大正から昭和にかけて『仙台の方言集』『土佐の方言集』などを執筆した土井八枝。

今回の展覧会では、こうした各時代を象徴する高知ゆかりの女性作家13人の活躍を通して、近代以降の女性文学史とその時代を検証しています。

展示解説の様子

初公開資料としては、北見志保子、大原富枝らに関する資料を紹介しています。志保子主宰の「花宴」などの編集をつとめていた平中歳子に宛てた書簡や、宿毛市立宿毛歴史館所蔵の宿毛小学校に建てられた歌碑の拓本、本山町立大原富枝文学館が所蔵している富枝の「明治の女」「新しい女性　和泉式部」「女作家の夜明け」などの草稿。（故）村上直子氏が所蔵していた昭和35年2月8日～昭和50年3月7日にかけて作家網野菊に宛てた富枝の葉書7通など、興味深い資料が揃っています。

また、多様な魅力を持つ高知ゆかりの女性作家に親しんでいただきたいと、県内外の出来事や女性史とともに、女性文学史を年譜として作成しました。各時代において女性文学者たちがどのような活躍をしたか、年譜を通して、ご理解いただけると思います。同時に、女性文学関係図を作成し、作家同志の関係や特色が一目で解るよう工夫しました。

さらに、13名の作家の特色を取り上げていますので、彼女たちがどのようにして自分たちの文学と向き合ったか、来館者の方々が知る一助となれば幸いです。

さまざまな関連企画も開催し、好評を博しています。

「時代小説、歴史小説の魅力」と題してご講演くださった作家藤原緋沙子さんの記念講演会は、一部地域における新型コロナウイルス感染拡大防止のため緊急事態宣言の真っ只中ではありましたが、藤原さんの前向きなお話に、大変盛り上がりました。会の終了後も熱心なファンの方々が藤原さんの新刊本に次々とサインを求められ、改めて、藤原さんのお人柄と小説家としての魅力を実感する会となりました。

その他、バレンタインにちなんで企画した和紙のブーケ作り、クイズイベント、高知ゆかりの女性作家の作品を読む朗読の会、おはなしキャラバンなど多彩なイベントも規模縮小の中ではありましたが、参加者の皆様に楽しんでいただきました。

展覧会を応援し支えてくださった多くの皆様に心より御礼申し上げます。展覧会は、3月21日までです。まだご覧になっていない方は是非、ご来館ください。

（学芸課長／津田加須子）

常設展 虫めがね

シリーズで変わる
常設展をご紹介！

記念年やテーマに沿って展示が変わる当館名物「変わる常設展」。
春からは【現代の文学】コーナーの大原富枝をタカクラ・テル（4月）に、【近現代の詩歌】コーナーの浜田波静を大江満雄（5月）に、【反骨の大衆文学】コーナーの浜本浩を馬場孤蝶（6月）に変更します！

タカクラ・テル

タカクラ・テル（本名・高倉輝豊のち高倉輝）は明治24（1891）年に大方町（現・黒潮町）で誕生しました。入野高等小、宇和島中学、京都三高を経て京都帝国大学英文科に進み、英独仏語のほかロシア語を習得し言語学への造詣を深めます。

卒業後は京都帝国大学の嘱託となる傍ら戯曲「砂丘」を雑誌「改造」に発表。以後は作家として独立し、戯曲や長編小説などを次々に発表。

「わたしわ、ダンテやドストイェフスキーやベルハーレンお愛読する人道主義者で、文学至上主義の要素お十分に持ったプチブル作家だった。」（※タカクラ・テル著『新文学入門』「あとがき」より）という高倉でしたが、大正10（1921）年に長野県で〝民衆が労働しつつ生涯学ぶ民衆大学〟を理念に設立された「信濃自由大学」に共鳴し、講師として長野県に移住。そこで文字や言葉や文学といった「教養」にも特権の要素が含まれていたことに気付きます。

「わたしわ、二わりのインテリのために、書くのでなく、のこり八わりの大衆のなかえ、大きく、はいって行かなければ、作品お書く意味がないと信じた。」（※）

この信念が農民運動、社会運動に深く関わり、作風に変化を生じさせる原点となりました。

以降は難解な文章表現を止め、筆名もタカクラ・テルと改名。国語国字合理化運動を実践し「高瀬川」「百姓の唄」「狼」の三部作や、綿密な取材を重ねた長編小説『大原幽学』『箱根用水』を発表します。

一方で、戦時下は国家権力と衝突し、合計4回に及ぶ検挙、投獄。釈放後は共産党衆議院議員になるも公職追放により中国とソ連（当時）に8年間亡命という波乱の生活を送りました。

94歳で逝去するまで民衆の幸福のために理想を追い、誠実に生きたタカクラ・テル。

今回は、その不屈の生涯を、著作、書簡、色紙などの資料で紹介するとともに、未来を担う若者に向けた作品なども展示します。ぜひご注目ください。

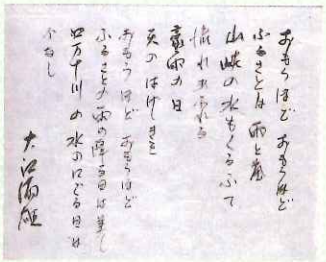
（学芸課／福冨陽子）

近現代の詩歌コーナー 大江満雄

大江満雄は、明治39（1906）年、幡多郡奥内村泊浦（現・大月町）に生まれました。14歳の時、当時暮らしていた中村が大洪水に見舞われ大きな被害を受けます。父と二人、家族と離れ親戚を頼って上京しますが、父は復旧の心労もあり急逝してしまいます。これらの喪失体験は、痛切な痛みを伴う原体験として彼の奥深いところに根差すこととなり、「四万十川」をはじめ、「雨」や「日本海流」など、家郷へのひとかたならぬ想いを詠んだ詩を数多く残しています。

22歳の時に第一詩集『血の花が開くとき』を刊行した大江は、プロレタリア文学運動の中心で活躍。そのため昭和11（1936）年に検挙され、3カ月間留置されました。戦争下において強いられた転向と、それに続く戦争協力詩は終戦以降も大江の上に重くのしかかることになります。晩年に発行した『自選詩集・地球民のうた』のあとがきの中で、「自己の思想の弱体性を反省することが、なにより、と思いました」と記しているように、自身と向き合い続けた大江が導き出したものは、人間の存在仕方は根源的に対話的であり、芸術（詩）はその反映である、という自分自身の在り様とその実践としての表現行為でした。こうして大江は、日本の詩壇において注目すべき〈対話詩〉という詩法に辿り着きます。

自身の詩作に取り組む一方で、終戦後、全国のハンセン病療養所に暮らす人々との詩を通しての交流が始まります。ハンセン病詩人たちによる作品を編纂し、昭和28（1953）年に詩集『いのちの芽』として刊行した大江は、そこに暮らす人々と対話と詩作を重ねます。このような大江の生き方は、詩「癩者の憲章」などに代表されるように、ハンセン病を病む人々と共にあろうという彼の意志に裏打ちされたものであったといえるでしょう。



自筆の詩「四万十川」

展示の中では、代表作「四万十川」をはじめとする大江直筆の色紙や、彼が選者として関わったハンセン病療養所の文芸誌などの資料を、平成3（1991）年に85歳で亡くなるまでの歩みとともに紹介する予定です。

（学芸課／道脇夕加）

土佐文学さんぽ 90

安岡章太郎『流離譚』雑感

高橋　正

「故郷というのは、やはり一種の恥部かもしれない」と語り、「カツオのタタキを電子レンジで焼き、旧藩主邸跡に俗悪な旅館をたてて地方は崩れていく」と嘆いたのは、戦後日本文壇の重鎮、安岡章太郎（一九二〇～二〇一三）である。

かれは高知生まれ。父が陸軍獣医将校で、住居は転々。高知には殆ど住んだことがなく、郷土意識が薄れていったようだ。

「私の親戚に一軒だけ東北弁の家がある」ではじまる『流離譚』（「新潮」昭51・2～56・4）は、作者の父祖、三百年続く土佐の旧家、安岡一族の波乱の運命を基軸に、激動の維新史をからめながら描いた千五百枚の大作。

安岡家は、幕末のころ、藩の家老吉田東洋を暗殺、のち吉村虎太郎の天誅組に加担、捕縛、処刑された安岡嘉助をはじめ、勤王の志士を七名も出している。うち五名は国事に奔走するなかで死んでゆく。

作者は香美郡山北村（現・香南市）の父祖の屋敷（重要文化財）から見つかった、膨大な古文書―日記・書簡・断簡類を一枚一枚めくり、判読し、父祖の生きた時代を再現。足らぬところは文献を博捜、想像力を駆使して、一大叙事詩を完成。藤村の『夜明け前』や『チボー家の人々』に匹敵する名作。小林秀雄を初め、好評蹟々たるものがあった。

なお、嘉助の弟、安岡道太郎は戊辰戦争従軍後、帰郷。「よしやなんかい苦熱の地でも粋な自由の風がふく」云々の『よしやぶし』（明10）の編・作者としても知られる。

（高知高専名誉教授）

香美郡山北村（現・香南市）の安岡家住宅

資料受贈報告

寄贈資料から

『せきれい丸』
たじまゆきひこ　きどうちよしみ作
くもん出版刊
令和2（2020）年11月　40頁
田島征彦氏寄贈

田島征彦さんは昭和15（1940）年大阪府堺市生まれ。少年時代を父の郷里高知で過ごした絵本作家です。『祇園祭』と『てんにのぼったなまず』で二度の世界絵本原画展金牌賞を受賞、型絵染とシルクスクリーンによる作品を次々に発表しています。

今回ご寄贈いただいた『せきれい丸』は、実際にあった海難事故を題材に描き上げられた絵本です。終戦の年の昭和20（1945）年12月9日、瀬戸内海の明石海峡で連絡船「せきれい丸」が沈没し、304人が死亡・行方不明となる海難事故がありました。「せきれい丸」は事故当時の朝、淡路島の岩屋港から対岸の明石港へと向かう途中、沖合で強風を受け転覆してしまいます。戦後の食糧難に闇市に買い出しに行く人や、島で手に入れた食糧を持ち帰る人で定員100人の船に3倍超の349人が乗っていたことが一因ともされています。

征彦さんは、平成13年の移住以来、淡路島を創作拠点として絵本を発表しつづけています。過去に発表した『ふしぎなともだち』では、淡路島での実話をもとに自閉症の青年と幼馴染みの青年が心を通わせる物語を、『のら犬ボン』は、淡路島の野良犬や動物保護に携わる人々への取材をもとに、犬と人間の関係を問いかけた一作です。今回の作品は、淡路島近海で戦争直後の混乱が生んだ「せきれい丸」海難事故の悲劇を乗りこえ、生きる力をとりもどす少年の物語です。

「どんなことがあっても生きるんやぞ」作中にある言葉です。征彦さんは「生きることの大切さを知ってほしい」と語っています。亡くなった人への鎮魂の祈りと遺された命の尊さ、平和と命の重みに思いを馳せる一冊です。

（学芸課／山崎真理）

受贈報告
（令和2年10月～令和3年1月）敬称略

▼**有川ひろ**・「阪急电车（『阪急電車』中国語版）　有川ひろ著　伏怡琳訳　人民文学出版社刊」他
▼**西田　勝**・「数奇伝　田岡嶺雲著　講談社刊」
▼**田所菜穂子**・「月刊予約絵本《こどものとも》123号　かわうそどんのくじらとり　安藤美紀夫作　田島征三絵　福音館書店刊」
▼**祥伝社**・「神の子　花川戸町自身番日記　辻堂　魁著　祥伝社刊」他
▼**橋田憲明**・「勾玉」800号記念　勾玉合同句集　「勾玉社」編集室編　勾玉社刊」
▼**山本　衛**・「詩集　わたしのダイアナ　山本　衛著　ONL刊」
▼**梶田順子**・「歌集　雲の海原　梶田順子著　ながらみ書房刊」
▼**林　亮**・「句集　歳華　林　亮著刊」
▼**島　総一郎**・「写真集　黒潮の海岸　島　総一郎著　飛鳥出版室刊」

「百花繚乱～高知の女性文学史～」展
初公開資料の中から

今回紹介するのは、昭和２３年から昭和３０年にかけて平中歳子に宛てた、北見志保子書簡２３通の中から、昭和３０年3月14日付の志保子最後の書簡です。

歳子は、「女人短歌」や「花宴」といった歌誌の編集を務めていました。

この書簡には「花宴の会」を４月に開催できるかどうか、また、吉田精一らが準備を進めている第三歌集『珊瑚』(と思われる)の出版記念会について、志保子の体調が思わしくなく、最後の会となるかもしれない、といった健康上の不安が綴られています。

志保子が亡くなったのが昭和３０年5月4日ですので、亡くなる2か月前に出されたものです。

御手紙拝見いたしました。このごろは私が身体をこわしもう二十日ほど全然食慾がなくどうなるのかと思ふほどです。四月の会までには治さなくてはと思つてゐます。

（中略）

私の出版記念会ハ長谷川書房がいたしますよし吉田精一氏などの連中の希望もあつて少し賑やかにするやうになるのではないかと考へてゐます一生の終りの会になるかもしれないとひそかに思ったりしてゐます。

青蓮の会はしないのですか。

四月は花宴の会はどうなさいますか。

できれば舞鶴へもゆきたいと思ひますがだめなら舞鶴から皆がでてくるそうですから。京都の□公主先生へおたのみして　嵐山の宿をお願ひして頂きたいと思つてゐます。

それからいつぞやのコート大変不自由してゐますから小包で御返し頂くやう御手配お願ひ申上ます。着物をきてゐましたので少々不自由しました。

御主人様へ山々およろしくおつたへ下さいませ

三月十四日　志保子

平中歳子様

封筒　表

京都市東山区

平中歳子様　消印　昭和三十年三月十五日

封筒　裏　春十四日

花宴短歌会編輯事務所

東京目黒区

北見志保子

なお、これらの資料は、高知出身の方の所蔵であり、当館への寄贈のご意志も頂いています。23通の書簡には、歌誌の主宰者としての苦悩も認(したた)められており、歌人北見志保子の晩年の研究においても興味深い資料となっています。

（学芸課長／津田加須子）

学芸員のおすすめ本

『寺田寅彦『物理学序説』を読む』

細谷暁夫著

（令和２年12月　窮理舎）

寺田寅彦著「物理学序説」は、彼の思想を著した未完の書です。岩波書店『科学叢書』の一冊として大正９年11月12日に起稿、約三分の一で中絶。寅彦没後の一年後に全集掲載、その後昭和22年４月に岩波書店より刊行されました。

表題作は、東京工業大学名誉教授の細谷暁夫氏が物理学の現状を踏まえ「物理学序説」を読み解いたものです。加えて、早稲田大学名誉教授の文学研究者・千葉俊二氏との対談、寅彦の「物理学序説」等も収録。「はじめに」には「物理学序説」の今日的な意義が記されます。理論物理学が高度に数学化され、実験も大掛かりな「事業」と変貌し個人の発想を活かすのが難しい今、寅彦が闇夜の道を照らす灯になるのではないか。自然を直視し、数学の言葉ではなく自然言語で物理を語ってはどうか、と。

さて、「物理学序説」の核心の一つに感覚の問題があります。初めは感覚によって捉えられた物理的実在が次第に感覚から離れ、非人間的になり、そのうちすべてが時間空間と光に帰着することである意味人間に帰るのではないか、と寅彦は物理学の過去から未来を展望しますが(第二篇第八章)、これは非人間的な実在を主張する科学者プランクと、感覚のみが実在の証と考えるマッハの論争が背景にあります(当館は寅彦が論争に触れた石原純宛書簡を所蔵)。因果律を「複雑に錯綜した網のようなもの」(第二篇第七章)と考える寅彦はプランクに疑義的ですが、物理の趨勢はプランクに傾いていました。細谷氏は対談で、プランクは研究戦略的に正しかったが、21世紀は逆転すると私見を述べています。

インターネット公開の単行本未収録の対談も注目です。文学の「粘菌化」というキーワードと共に、多くの人によって繰り返し読まれたものの総体がイコール文学史であれば、科学との類似が出てきてもおかしくないという大変興味深い指摘がなされています。

百年前の寅彦の文章を通して今を見直す、知的好奇心を刺激する良書です。分野問わず、自分の道を模索する方はぜひご一読を。世界が変貌するかもしれません。

（学芸課／川島禎子）

ショップより

寒さの中にも少しずつ春の暖かい日差しが感じられ、冬ごもりをしていた虫たちがはい出てくる「啓蟄」の頃となりました。この冬ごもりの虫たちですが、チョウやミツバチといった昆虫に限らず、カエルやへび、熊など生き物すべてが含まれているようです。

ミュージアムショップでは、3月21日まで開催の「百花繚乱～高知の女性文学史～」展にあわせて、大塚楠緒子、小山いと子や倉橋由美子、宮尾登美子、藤原緋沙子などの女性作家の書籍を取り揃えております。

美濃和紙を使った一筆箋やレターセット、花や少女、動物などをモチーフにした華やかな色使いのブロックメモ、《中原淳一》のはがき箋、ちりめん素材の和菓子小物の根付けやお香なども販売しております。

大原富枝著『婉という女』『アブラハムの幕舎』は、当企画展終了後もショップにて取扱いを致します。

文学館にお越しの際には、是非ショップにもお立ち寄りください。

（総務事業課／海治紫野）

館長エッセイ

その時代の文学

4か月の休館を経て、お正月の開館から早くも2か月あまりが経過。

このところの柔らかな陽射しを受けて、藤並の森にある木々の花芽も心持ちふっくらとしてきた。例年より寒かった冬も、いつの間にか終わりが近いようだ。

春が近づくにつれ、高校生達の姿が館内に見られるようになった。真剣な表情で、思い思いにパネルを読んでいる。

若者の読書離れが言われている現代。確かに、印刷された本を読むことは少なくなっていると思う。しかし、何時の時代でも人は悩み迷える存在。とりわけ漠然とした不安の漂う現代、若者は、今はアニメやゲームやスマートフォンの中で展開される物語からその答えを得ようとしているのではないかと思う。

また、時代とともに悩みや迷いは変化する。近代から現代に至るまで、例えば貧困や病気を糧に、生きぬくという意思を文章に託した大原富枝や上林暁、時代の激変の中で、人権や自由、自己の有り様を追求した中江兆民や安岡章太郎、その感性が現代の若者の心をとらえる有川ひろや中脇初枝といった作家達。

伝える手法が何であれ、何時の時代でも、作者が真摯に自分自身の経験と苦悩を糧に紡ぎ出した文章は、それを読む私たちに重く深く響き、共感と希望につながっていく。

4月10日から「シンデレラ展」が始まる。今でも、多くの人々に愛される色あせない物語だと思う。

（岡﨑順子）

常設展企画コーナー

入れ替えのご案内

現在開催中の「スポーツと文学～作家がとらえた躍動の一瞬。物語る文学～」（3月21日（日）まで）は、昨秋からの休館期間に一部資料を入れ替え、皆様にお楽しみいただいています。

オリンピック各大会のルポルタージュや、ヘルシンキやモントリオールなど各大会出場選手の記念品、マラソン選手の円谷幸吉について書かれた川端康成の原稿「円谷幸吉の遺書について」など引き続きご覧いただける資料のほか、向田邦子・高峰秀子らの著書や、オリンピックに沸く人々をユーモラスに描いた漫画家・横山隆一の原画などを追加しました。なかには、選手直筆の短冊や色紙・シューズなど、この機会でしか見られない貴重な資料もありますので、ご注目いただければと思います。

（学芸課／野々村昭美）

展示の様子

高知県立文学館ニュース 第92号 令和3年3月1日発行 〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1番20号 電話088-822-0231 FAX 088-871-7857

高知県立文学館 カレンダー

次回開催！

シンデレラ展

～ 語り継がれる幸せの魔法 ～

会　　期　令和3年(2021)4月10日(土)～6月13日(日)
会　　場　高知県立文学館　２階企画展示室
開館時間　午前9時～午後5時(入館は午後4時30分)
観 覧 料　一般500円(常設展含む)、長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

関連企画のご案内

ガラスの靴で撮影会☆

本物のガラスの靴でシンデレラなりきりフォトを撮影しよう！
(撮影はお客様ご自身のカメラやスマートフォンでお撮りください。)

日　時　5月23日(日)、6月13日(日)
午後1:00～3:00
場　所　高知県立文学館2Fロビー(着替えスペース1階ホール)
参加費　要当日観覧券
申　込　※3月10日より受付開始。電話または文学館受付にて事前申し込み(定員30名)。
※撮影会ではガラスの靴を履いて歩くことはできません。座った状態での撮影となります。
※大人用ドレス先着5名、子ども用男女各1着お貸しできます。申し込みの際に希望をお伝えください。大人用ドレスの選択は電話いただいた順となります。

キラキラのティアラを作ろう☆

モールでオリジナルティアラを作ってみよう！

日　時　4月18日(日)、5月9日(日)
午後1:00～4:00
場　所　高知県立文学館1階ホール
参加費　要当日観覧券　　申　込　不要
※席が埋まっている場合、お時間をいただくこともありますので、ご了承ください。

幸せの言葉集め

館内で文字を集めて「幸せの言葉」を完成させ、オリジナル缶バッヂを手に入れよう！

参加費　要当日観覧券

木洩れ日コンサート

藤並の森にてシンデレラをイメージした曲を演奏します。

日　時　4月29日(木・祝)　午後2:00～
(開場　午後1:30～)
演　奏　ＮＰＯ法人こうち音の文化振興会会員
場　所　高知県立文学館前　藤並の森
(雨天時は文学館1階ホール)
参加費　無料　　申　込　不要

朗読の会「プリンセスたちの物語」

当館カルチャーサポーターの朗読でお楽しみください。

日　時　5月15日(土)　午後2:00～4:00
(開場　午後1:30～)
場　所　高知県立文学館1階ホール
参加費　無料　　申　込　不要

おはなしキャラバン「土佐の高知のシンデレラ」

土佐民話紙芝居より、シンデレラの類話などをご紹介。

日　時　5月1日(土)　午後2:00～2:30
※「によどの川風」(越知町)その他
6月5日(土)　午後2:00～2:30
※「まま子のお藤」(佐川町)その他
場　所　高知県立文学館1階ホール
演　者　当館カルチャーサポーター(予定)
参加費　無料
申　込　不要
(当日、直接会場までお越しください。)
※席が埋まっている場合、2回目の公演をご案内させていただきますので、ご了承ください。

好評開催中！

「百花繚乱 ～高知の女性文学史～」展

会　　期　令和3年(2021)1月16日(土)～3月21日(日)
会　　場　高知県立文学館　２階企画展示室
開館時間　午前9時～午後5時(入館は午後4時30分)
観 覧 料　一般400円(常設展含む)、長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！
詳しくは・３ページ目をご覧ください。

ファイナルイベント

展覧会の最終日には先着で素敵なオリジナルグッズをプレゼントします！

東京2020オリンピック・パラリンピック聖火リレートーチを展示します！

3月20日(土)・21日(日)には高知でのオリンピック聖火リレー開催を記念し、聖火リレートーチを展示します。トーチは、高知県内を巡回し今年度は当館が最終展示会場となります！(予定)
トーチのみの観覧は無料ですので、この機会にぜひご来館ください。

日　時　3月20日(土)・21日(日)
9:00～17:00
(入館は16:30まで)
会　場　文学館1階ロビー
観覧料　無料
※展覧会観覧には、別途観覧料が必要です。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示および関連イベントは中止・内容を変更する場合があります。

みなさまのご協力をお願いいたします

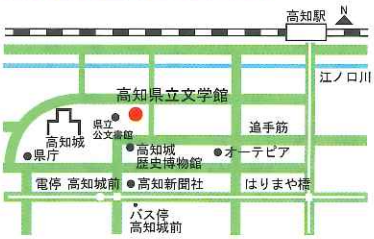
- 体調不良の時には来館をご遠慮ください。
- 入口やトイレに消毒用アルコールを設置しておりますのでご利用ください。
- 咳エチケットや、マスクの着用、人が多い場所では会話を控える等のご協力をお願いします。
- 観覧の際は、ほかのお客様と十分な距離をとってご観覧ください。
- 展覧会混雑時には入館をお待ちいただく場合があります。
- 職員はマスクをして対応いたします。

お客様に安全に観覧いただくため、ご不便をおかけしますが、ご理解ご協力下さいますようお願い申し上げます。

利用案内

開館時間　午前９時～午後５時(入館は、午後４時半まで)
休 館 日　年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観 覧 料　一般370円　企画展はそれぞれ異なります。
20名以上の団体は２割引。高校生以下無料。
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病手帳又は被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名、高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。
(窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)
駐 車 場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備　ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(県庁前行)「高知城前」下車、北へ徒歩５分または(高知駅行)「北はりまや橋」下車、徒歩20分
- JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩５分
- バス停「高知城前」下車、北へ徒歩５分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
高知県立文学館 検索